

エッセイ「最も胸アツ！！Nursing エピソード」(看護師の部)

最優秀賞受賞作

私にできること

松岡 愛菜

パキン。挿管介助をする私の心の中に、そのような音が鳴り響いた。

「ごめんなさい、切れちゃった」そう謝る麻酔科医。

挿管の影響で唇が切れてしまった患者さんを見ながら、私はこう言った。

「乾燥してたんですかね」

じわり、じわりと滲んでくる血をガーゼでそっと拭う。

挿管の前に、保湿したら切れなかったのかな。そんな後悔で胸がいっぱいになる。

手術が終わると、麻酔科医が抜管をする。患者さんの唇を見してみると、さっきまで薄らと滲ませていた血は小さな小さな瘡蓋になっていた。手術でお腹にできた大きな傷とは比べものにならない小さな傷。それでも、この小さな傷はちょっとした私の工夫で防げたのかもしれない。

これは手術の傷以外の傷だ。ごめんなさい。まだ覚醒したての患者さんに声にならない声で謝った。

3日後、その患者さんが退院する直前に術後訪問として部屋に行った。

「人工呼吸のための管をいれる時に、唇のところが少し切れて血が出ちゃったんです」

そう謝った私に、「そうなの？全然気づかなかったわ」、そう笑いながら返してくださいました。

退院の日だからか、綺麗に化粧を施している。うっすらと唇をピンクに染めているのだから、気づかないわけがない。

患者さんに気を遣わせてしまったな。患者さんに気を遣わせてしまう自分が悔しかった。私は次の症例から、挿管前に患者さんの唇に保湿剤を塗ることにした。たとえ小さな傷だとしても、その小さな傷はどんな患者さんにも必要のないものだから。

素敵で笑顔で退院できますように。そう願って。

(選評)

とても小さなエピソードが綴られていますが、作者にとっては大きな転機であったことがよくわかりました。うまくいかなかった時の、看護師としての申し訳なさや悔しさ、後悔など苦しい気持ちにとっても共感しました。その後、きちんと術後訪問で患者さんと向き合い、次の患者さんに活かされているところが素晴らしい。私たちに、一つの例として、自分の看護を振り返る機会になり、日ごろから大切にしている手術看護への思いが感じられる作品です。

エッセイ「最も胸アツ！！Nursing エピソード」(看護師の部)

優秀賞受賞作

お産
齋藤 友厚

「グレード A (超緊急帝王切開術) です」。助産師の大きな声とともに、手術室に妊婦が勢いよくベッドで搬送されてきた。

「ごめんなさい、私が悪いから。ちゃんと産んであげられなくて、ごめんなさい」と妊婦は胎児へ向け何度も謝っている。急な帝王切開となり、突然の出来事に戸惑っているのが伝わってくる。私は「お母さんも、赤ちゃんも、誰も悪くない。帝王切開は立派なお産です。さあ、元気な赤ちゃんを産みますよ」と声をかけた。妊婦は笑顔で頷いたかに見えた瞬間、全身麻酔で眠った。

麻酔から覚めた母親へ「元気な男の子でしたよ」と伝えると、「知っています。全部、見ていました」と言う。私がキョトンとすると「急な帝王切開で卑屈になった私に、神様がしっかりしろと見せてくれたと思います。先生や看護師さんが一生懸命、あの子を産ませてくれる様子を……」。それは夢ですよと心の中で思ったが、話す必要はない。この母親にとって、それがまぎれもない事実であるのだから。

退室の際、母親が「看護師さんが私の握っていた安産の御守り、麻酔で眠って手から落ちないようにと、手術中ずっと握りしめさせてくれていたことも知っています。大きく、力強く、それでいて暖かい手。おかげで立派なお産ができました。本当に安産です。ありがとうございました」と笑顔で言ってきた。ドキッとして、本当に見ていたのですか？と聞き返したかったが聞けなかった。

それよりも今は手術室で唯一、帝王切開に対してだけ言える御祝いの言葉「本日は、おめでとうございます」と心から伝え一礼した。無事にお産を終えた母親を見送る。手術室看護師にとって至福の瞬間だ。

しかし、自分の看護を全身麻酔中の眠っている母親が見ていた。なんとも不可思議な体験だ。

それ以上に、自分の行った看護に「ありがとう」と言ってもらえる。このことを誇らしく思い、看護師冥利に尽きると胸を張った。

(選評)

超緊急帝王切開術の緊張した中で、一生懸命妊婦さんの気持ちに寄り添う姿勢が伝わってきました。「全身麻酔がかかった患者は何も覚えていない」という認識を覆す不思議な話から、どんな状態の患者さんでも自分たちの看護をみており、その意識を無くしてはいけないことを改めて感じました。手術室看護師としてどうかかわるか、私たちだからこそ味わえる手術看護の魅力が伝わってくる作品です。

エッセイ「最も胸アツ！！Nursing エピソード」(看護師の部)

優秀賞受賞作

笑 顔
山崎 千夏

看護師歴2年目、手術室看護師2年目。新人だからこそ、純粋な視点から手術室看護師の魅力を言いたい。内科病棟希望だったのになぜか希望もしていない手術室に配属になった。患者さんに笑顔で寄り添う看護師を想像していた自分にとって、思い描いていた世界ではなかった。

1年目の5月、何の術後かもわからない状態の患者さんの傍に、先輩看護師から「とりあえず近くにいて！」と言われた。患者さんの意識ははっきりしており、患者さんの方から「新人さん？」と聞かれた。私はかなり驚きつつ「はい。すみません、何もできなくて。」と答えた。すると「君がその笑顔で傍にいてくれるだけで安心する。何もしなくていい。」と言われた。手を握りながら退室まで患者さんと一緒にいた。患者さんは泣いていた。

2年目になった。腹腔鏡下右半結腸後の患者さんに手術が終わったことを伝えた時に「本当に安心したわ。ありがとう。」と言われた時の安堵の表情は今でも忘れられない。その手術の患者さんだけではない。手術が無事に終わったことを伝えた時の患者さんの安心の表情、笑顔、涙、ありがとうという言葉、そのすべてが印象的である。手術室看護師にしか想像のしがたい光景ではないだろうか。

手術室看護師だから患者さんと関わることのできる時間が限られているというのは誤解であった。器械出し看護師としては常に患者さんの近くにいて急な出血がないか確認をしつつ、体内に遺物の残存がないよう気を張っている。外回り看護師としては入室時の声掛けや術中の体温管理など患者さんの全身管理を行う。自分の思い描いている看護師像を現実のものにできるかは自分次第であり、私はこれからも初めての手術で不安な患者さんや何度も手術をされていて常連さんのような患者さん、手術室を訪れるすべての方を、傍で、笑顔で支えていきたい。そのための行動を惜しまない手術室看護師でありたいと思う。

(選評)

希望していない部署の手術室で、自分の存在や行為が手術を受ける患者さんにとっての意義を見出し、手術室看護師としてどういうことを大切にしていきたいかなど、手術室看護師の魅力が率直に述べられ、その情熱を感じる作品です。